

『小説・修復腎移植』



著者・青山淳平

挿絵・山本良秋

発行所・本の泉社

処分

「ほしたら、記者さん、ええかな。段畑のそらへ行くけん」

源蔵さんは肩にかけていた手ぬぐいで首筋をぬぐうと、腰をあげた。

「そら」というのは、宇和島の三浦半島の漁村にふるくからつたわる方言である。どこそこの上へ行く、という場合につかう。半島のなかほどにある遊子水荷ゆすみずが

浦うらの漁村を訪ね、漁村のむかしの暮らしを水野に語ってくれた源蔵さんは、手押し車をおしながら丘の小道をのぼりはじめた。ゆくてには、胸をつくような段畑が秋の高空へせりあがっている。

つみかさなつてそらへ上がる畑は、半島にきざまれた歲月そのものでもある。江戸時代のなかば、村にサツマイモがつたわつてくると、海辺にせまる山林をきりひらき、イモ畑が築かれはじめた。半島の山は、「三月耕せば足がまがる」といわれるほどの傾斜地である。明治の末ころからは、イワシの豊漁がもたらした金で段畑の石垣化がすすむ。そしていま百年の月日がながれ、段畑と海がおりなす遊子水荷浦の風光は、国から「文化的景観の保存・活用地域」に選ばれ、観光地として注目されるようになった。

それで、というわけではないのだが、ずっとこれまで月末に連載してきたシリーズ企画「えひめの漁村のすがた 今昔」の最終回がこの漁村になったことに、水野はひとしおの感慨をおぼえるのだった。

この岬に人が暮らして四百年がたっている。イワシをもとめて漁師がすみつき、集落ができた。段畑はふえた人口を養うため、上へ上へとせりあがったのだ、と村の世話役が話してくれた。ここ百年のあいだ、イワシ、煮干し、真珠母貝、そしてハマチとタイの養殖へと漁村の生業はかわり、段畑の作物はサツマイモ、養蚕、ジャガイモをへて柑橘類に変化している、と教えてくれたのは役場の文化的景観保存課の職員だった。

取材の最後にあつた源蔵さんは、木綿のシャツをぬぎ、左の肩にできた大きな「荷こぶ」をみせてくれた。天秤棒で水やこえたごをかつき、段畑をのぼりおりした勲章である。いまは荷物を運搬する急傾斜地用のモノレールが敷設され、天秤棒は手押し車にかわっている。遊子水荷浦は有名になって、季節のよいこの秋ごろには、観光客が段畑を観にたくさんやってくる。それで畑の草取りはやめれるのよ、と源蔵さんは自慢げに語った。午睡から目覚めたかれは、磯のにおいにする自宅の濡れ縁で水野の取材に応じたあと、手押し車おして「そら」へと、でかけていったのである。

秋の日ざしが海と半島の陰影をひとときわこくしていた。

水野には遊子の漁村の暮らしと風光が、ひとときわ愛しく目に映るのだった。結

婚したころにもかれは新聞社の仕事でなんどか、この地を訪れていたことがある。それから還暦がちかくなつたいま、同じ情景を目にし、村人と話を交わしてみると、若いときとはまったくちがった自分に水野は気づいた。なにより、まなざしがやさしく濃こやかになっている。それだからこそ、この歳になって初めて感じ入るものが、からだの奥深くへとどいてくるのである。

久美子を介護するようになって、自分はすこしずつ変わってきたのだ、と水野はふりかえる。久美子の病いを受けいれるのはつらいが、悪いことばかりではない。知能が子どもレベルへと退化しはじめている久美子は、これからさらに脳が委縮し、やがて幼児のように澄んだ瞳を夫にむける日がくるだろう。そんな妻をうけとめる心の準備がすなおにできるのも、老いて歳をかさねるありがたさなのだ、と水野は自分にいいきかせる。これからの日々は、久美子と同じ澄み切ったまなざしでいきいきしたい、と水野は願うのである。

そして、まなざしといえれば先日、十月の定期検診で丸山医師にあったとき、水野は気づいたことがあった。瞳の表情が久美子と丸山医師はよく似ていた。ふだん瞳の表情など気にもかけないことなのだが、その週の日曜日にひらいた求める会の役員会のあと、有吉が音楽教室の生徒たちとはじめた、「葉っぱのフレデイ」のオペレッタの練習のことを水野に話してくれたことがきっかけだった。

「世界は変化しつづけている。変化しないものなんてなにひとつない」
と有吉は「葉っぱのフレデイ」の世界観を語った。それからつづけて、

「いのちだって変化しているの。誕生と死はいのちの一番大きな変化なのよ」と死生観をつたえると、生徒たちはとたんにくびをかしげ、

「死んだら、いのちはなくなるのでしょ？」
とたしかめる。

「いのちはなくなるならないの。かたちをかえるだけ」

「かえるって、何になるの？」

「さあ、なんだろう」

有吉は考えたが、うまく答えられない。

人や動物や植物はもちろんだが、土や水や空気にもいのちがあるように思う。

「みんなのなかにあるもの、お母さんやお父さんのなかにもあるもの。葉っぱにも木にも土にもあるもの。なんにでもあるとっても不思議なちから、それがいのち」

「不思議なちから……、それは、月にも星にも太陽にもあるの？」

「そうね、海にも山にも。フレデイを枝からはがした北風にだっていのちはある」

「悪い北風さんにまであるの、ねえどうして？」

と幼稚園に通う子が口をとがらせる。

「どうしてだろ、いのちに訊いてみないとね」

「あれ、先生、変なの。そんなこと訊けないよ」

と小学校の上級生の子がおかしがった。

話しあっても答えにゆきつくはずはなかった。それでも有吉にはひとつの発見があった。いのちについて考えているときの生徒たちの真剣なまなざしである。

やさしく澄んでいた。

有吉は楽しそうに、こんなことを水野に語ってくれたのだった。

それで、有吉から聞いたことをそっくり丸山に話すと、ふだん無口な医師が反応した。

「水野さん、わたしは患者をみとりやせんぜ。金持ちだとか貧乏だとか、立派だとか偉い人だとか、そんなことはいつさい知らん。わたしが見とるのは患者のなかのいのちだけ。いのちに偉いも金持ちもない。いのちはいのちや。みんなひとつのいのちや。そのいのちと向き合い、いのちを元気にさせるのがわたしの仕事じゃけんな」

きゅつと口元をひきしめると、丸山はくるつと横をむき、カルテに視線をそそいだ。何か恥ずかしそうに、手にしたボールペンを指でもてあそんでいた。

そのときの丸山の表情と仕草を思いだすと、水野は自然に笑みが浮かぶ。丸山医師もここ二年ほどで、やはり変化しているのだ。

源蔵さんはどこまで登っただろうか。

現実にかえった水野は望遠レンズを段畑の上へむけた。

やがて丸いレンズのなか、石垣の坂道を登る老人のすがたがみえた。手押し車が段畑のそらへとどいたところで、水野はシャツターをきった。

文化の日に求める会の役員は松山市内の繁華街で、厚生労働大臣と愛媛社会保険事務局長に宛てて発送した「地域医療の崩壊を招く」と題する要望書をゆきかう人々にくばり、行政処分反対の署名を求めた。要望は、市立と恵州会の両病院の保険診療の保証、丸山医師の診療活動の継続の保証、そして修復腎移植を日常的医療として認めることの三点であった。すでにこれまで向井原が中心となつて集めた署名は八万名をこえていた。目標の十万名まであとひと息である。

朝の十時から街頭にたつた。昼食は各自でファーストフードの店ですまし、午後の三時まで署名をよびかけた。きさくに応じてくれるのは中高年の女性たちで、逃げるようにとおりすぎるのは、同じ世代の男たちである。とくに仕事をもち現役世代の男たちが素っ気なかった。何度も署名活動をしている役員たちはよく心得ていて、ネクタイをした勤め人、とくに学校の教員や公務員らしい男はあてにせず、なるべく主婦と高齢者、それに高校生や大学生にターゲットをしぼ

って声をかけ、署名簿をさしだした。「がんばってねえ」、「身内に透析している者がおるんよ」、「丸山先生、ええ顔してるわ」など好意的な声をかけてくれるのも、子育てをおえた世代の主婦や高齢者たちだった。

署名活動をおえると、喫茶店の会議室をかりて、役員会をひらいた。

前日、野添事務総長から水野へファクシミリでふたつの事案と朗報がとどいていた。

事案の内容について、水野は野添と電話で意見を交換している。ひとつは懇話会の勉強会のことである。七月の厚労省の通達以後、しばらくなりをひそめていた国会議員たちの懇話会のうごきがいよいよ本格化し、懇話会側から一ヶ月後の十二月五日、ふたたび衆議院第一議員会館会議室を会場にして、厚労省、移植学会、瀬戸内海グループの医師、恵州会本部、それと患者側は求める会から何名か参加してもらい、大がかりな勉強会をひらきたい、との相談が野添によせられた。快諾した野添は、求める会からできるだけ大勢で参加してほしい、と水野に電話で要求した。直接、厚労省へはたらきかけるよいチャンスである。水野が二つ返事で承諾すると、野添は、「ペリーも二度来航したように、われわれとしてもミズリー号作戦の第二弾をやりませんか」とふたつ目の事案にふれた。ファクシミリで送られてきた文書には、年明けの一月下旬と二月はじめに二回、前回と同様の運営方法で国際腎シンポジウムを催したいので、求める会の了解と協力が欲しい、と記されていた。そしてこれと関連して、朗報があった。丸山医師ら瀬戸内海グループの医師がまとめた修復腎移植に関する論文が、「米国移植外科学会（ASTS）・冬季シンポジウム」で、演題トップテンに選出されるといふ快挙である。

この論文は、五月にサンフランシスコで開催されたアメリカ移植会議で採用され、丸山医師が発表する予定になっていたのに、日本の移植学会の横やりで、採用が取り消されたものとはほぼ同様の論文である。ふたたび日本の学会が米国移植外科学会へ発表させないように要望しても、アメリカ側がその要望を受け入れることはありえなかった。かりに日本側からそのような要望があれば、今度日本の学会が噛みものになる。修復腎移植にたいする評価は欧米では格段とすすんでいるのである。

発表は2008年1月25日から三日間、フロリダ州のリゾート地マルコ島で開催されるシンポジウムのなかである。丸山をはじめ瀬戸内海グループの医師は、みんなこの学会に参加することになった。

この朗報を伝え、それから二つの事案を水野が明かすと、署名活動で疲れている役員たちは元気をとりもどした。フロリダ州のマルコ島まで応援にかけつけるわけにはいかないが、勉強会への参加も、それに東京での国際腎シンポジウムの運営もみんなが賛成である。勉強会には役員が仲間の会員を誘い、オプザーバ

「もふくめ三十名ほどの参加が見こめそうであった。また国際腎シンポジウムは、東京の赤坂のホテルが会場になっていた。日本とアメリカのほかに新たにオーストラリア、イタリヤ、それにスペインの移植外科医や研究者が来日し、腎移植医療の現状と課題について講演したあと、意見を交換する。前回同様、裏方はいつさい惠州会本部がやるのだが、当日の会の運営は求める会である。」

「わたし……」
すみの方にいた有吉が、小さく手をあげた。

「有吉さん、どうぞ」

進行役の向井原が太い声でうながした。

「すみません。ちよつと、無理かもしれません」

と有吉は申し訳なさそうな顔になった。

「あれ、どしたん？」

向井原が意外そうに声をあげ、みんなの視線が有吉にあつまった。

光線のせいなのか、顔色がすこし黄色い。

「ご心配をおかけしたらいけないと思って、いわなかったのですが、数値が上がり気味で、上京となると自信がありません。それでシンポジウムの司会はだれか他の方にお願ひします」

「いま、いくら？」

とかたわらの女性役員が訊いた。

「3をこえました」

と有吉はクレアチニン値を明かした。みんなは一様に表情をかたくした。

移植した腎臓がいつまでもつか、移植者はつねにその不安をかかえている。有吉は母親からもらった最初の腎臓がダメになってゆくまでのことを体験している。いま腹部にある父親の腎臓が機能を失いはじめると、決して回復はしないことを有吉はよく承知していた。つらいことだが、少し冷静になって見通せば、透析にもどる日を予測できる。あと半年か一年、養生につとめればもうすこし。しかし遅かれ早かれ腎臓はダメになる。

「これも相性があるけんなあ」

移植して二十年をこえる役員がせつなそうにいった。二十年というのは幸運で、それ以上の移植者もいるが、移植した腎臓は十年が一区切りといわれている。しかし有吉のようにその半分しかもたないこともある。

「修復腎のほうか、もちがええなあ」

と年配の役員が座を和らげるようにいい、水野のほうをみた。

向井原も修復腎だが、漁師をしていることもあって、顔色はよくない。移植をしている役員のなかで、見た目にもすこぶる健康なのは水野だった。胃腸が丈夫なので肌にはりがあり色つやもよかった。

「健康な人でも四十をすぎれば、腎臓にはなんらかの疾患がありますから、移植につかわれる腎臓が百パーセント健康なんてことはありませんね」

と水野はいいわけのようなことをいった。健康な腎臓をとりだしても、とりだす手術それ自体で腎臓は傷つき、さらに移植するまでの間に劣化がすすむことはさけられない。

会員たちは勉強会に参加している地元選出の国会議員のことや、丸山医師のフロリダでの発表のことなどを話題にして話しこんだ。ただ有吉は会話をもちあげることはなく、力のない視線を宙に泳がせているだけでいつもの活気はなかった。

会がひけたあと、水野はバス停まで有吉と歩いた。

風がたち、街路樹のイチョウが葉を落としていく。

バス停がちかくなつて、有吉はたちどまった。

互いにふりむき、

「力になれなくて……」

と思わず、ふたりは同じことを口にした。

「あら、変なの」

有吉は可笑しがり、やっとかすかな笑みをうかべた。そして、

「事務局だけは、なんとかつづけます」

と約束した。

「まだまだ先のこと、いまはからだを大事にしないと」

「ええ、でも自分のことはよくわかっています」

「何かあれば、すぐ知らせてください」

有吉はうなずくといった。

「病腎問題が国会でとりあげられたらいいな。議員さんの勉強会に期待しています」

「みなでがんばってきますよ」

「いけなくなつたけど、応援しています」

思いがけず、有吉の右手がすつと水野のほうへ差しだされた。

やわらかな手をかろくにぎりかえし、

「処分がいかに不当なものか、訴えてきます」

と水野は選手宣誓のような表情でいった。

ひと月後の十二月五日、朝一番の飛行機で上京した求める会の会員三十人は、厚労省が入っている中央合同庁舎の玄関前の道路に集まった。冬型の高気圧が日本列島へはりだし、ビルの谷間は凍てつくほど寒かった。会員たちはからだを寄せ合い、目の前の巨大な庁舎へむかつて拳をふりあげ、シュプレヒコールをあげた。といつても大都会のただなかの三十人である。反応らしいことといえれば、

庁舎の玄関前の守衛が退屈そうに、ちらちらと会員たちの一群をみていただけであった。三々五々に別れて昼食をとったあと、衆議院議員第一議員会館にふたび集合し、慎重な面持ちで会議室へはいつていった。

シユプレヒコールをあげた庁舎前の道路とちがい、広い会議室はむっとする熱気とはりつめた空気がみなぎっていた。

患者代表として証言をもとめられている、向井原と森、それに水野の三人は長方形に配置されたテーブルの最前列に座った。テーブルの上にマイクがおかれ、その横には日本茶のペットボトルが用意されている。正面と窓側は国会議員が陣取っていたが、その中の何人かはテレビや新聞でよくみかける顔である。ずらつとならんだ名札には、自民党厚生労働部長、参議院環境委員長、外務委員長、テロ対策特別委員長などの肩書きがかかれています、いかにもものしい雰囲気である。瀬戸内海グループの医師四人は患者と同じ証言席に、そして厚生省から出席した健康局長と同局の課長、それにふたりの課員は移植学会の多島伸一副理事長と同じ列に着席した。求める会の会員たちは、報道席の前にかたまつて座った。

会の冒頭、司会進行役の杉田正健元法務大臣が厳しい口調でいった。

「健康局長、あなたにも来てもらって今年の七月三日に四回目の懇話会を催したとき、ひとりでも多くのいのちが救える修復腎移植を前向きに検討していく、という回答をわれわれはあなたからもらっていた。議事録にもそうありますが、確かですね」

「はい、そのように記憶しております」

「しかし、回答から十日後に出された厚生省通達は、有効性及び安全性が予測されるときの臨床研究としておこなう以外は、病腎移植をおこなってならない、と記し、事実上修復腎移植を禁止してしまっている。そうじゃありませんか局長、あなたに確認を求めます」

「おっしゃるとおりでございますが、もうすこしつめて申し上げますと……」局長はとなりの課長がさしだした、通達文のさわりを読みあげた。

「病腎移植は、医学・医療の専門家において一般的に受け入れられた科学的原則に従い、という前提を設けてございまして、有効性と安全性が予測できましたら、臨床研究は可能なのでございます」

杉田はひとつうなずくと、マイクをひきよせた。

「たしかにそうだ。それでは局長、あなたがたのいう専門家というのはだれですか。この場で答えられますか」

会場の視線がいつせいに局長へ集中した。

「ご芳名をお求めでしょうか」

「ええ、出席のみなさんにわかりやすく頼みます」

「誠に恐縮ですが、個人的なお名前をあげるのは差し控えたいと存じます。私どもが記した専門家と申しますのは、医学や医療の高度な専門集団と理解しております」

「すると局長、修復腎移植の専門家は全国移植学会ということですか」

「はい、移植学会は専門集団です」

「あなたのとおりにお座りの多島先生はその移植学会の副理事長でいらっしゃる。当然、専門家ですね」

「もちろん専門家でいらっしゃいます」

「では、局長」

杉田は証言席の四人の医師へ視線をうつした。

出席者もみんなグレー系のスーツに地味な模様のネクタイをして、肩をならべる丸山たちをみつめた。

「今日、証言をいただく医師のみなさんは、日本でも有数の臨床の移植医でいらつしやる。なかでも丸山先生の腎移植数は七百件をこえておられる。四人の先生方の移植数を合計すると一千件はゆうにこえるそうです」

と杉田は四人の医師の腎移植の実績を紹介し、局長へ視線をもどすと訊ねた。

「あなたは移植学会の幹部のみなさんの腎移植数はあくしてありますか」

「正確な数は承知しておりません。しかしそれなりの実績をお持ちかと……」

「ほう、それなりですか。ちなみに多島先生、いかがですか」

突然ふられ、多島は顔に不快そうな表情をうかべた。

「たしか、腎移植はざっと百五十ぐらいだったと記憶します」

「直近はいつですか」

「直近といわれましても、もう臨床の現場をはなれて十数年たちますから、調べてみないとわかりません」

「移植関連の四学会が今年の三月三十一日に病腎移植を否定する声明をだしましたが、この声明にかかわった医師の先生方に臨床の現場の方はいましたか」

「おりません。みなさん臨床からははなれております」

「移植の実績はどうですか」

「だいたい、わたくしと似たようなものかと」

「わかりました。率直にお答え下さり、お礼を申し上げます」

と杉田は多島に謝意を表すると、局長へ視線をもどした。それから議員たちをみまわし、うなずきあった。

「学会幹部の先生方はそれなりに立派な医学者でいらつしやるが、腎移植の専門家ということになると、お招きした四人の先生であることは、はっきりしましたわな。この判断はまちがっていませんね、局長」

と杉田は厚労省側に確認した。

局長は返答に窮し、黙っている。

テレビの討論番組によく出演している人権派の議員が、声をあげた。

「患者が元気になっていないじゃないか。厚労省はなぜ禁止するんだ。答えろ」

「学会は妥当性がないということでした」

「声明をだした学会幹部は、なんもわかってはおらんじゃないか」

と太い声で同じ議員がどなると、そうだと他の議員から声がとんだ。

杉田は局長をみすえながらいった。

「四人の先生方は毎日腎不全の患者さんと向き合い、一千件をこえる腎移植をされている。いいですか局長。修復腎移植は毎日のちと向き合ってがんばっておられる患者と医師のあうんの呼吸のなかからうみだされた。厚労省はそのところをしっかりとふまえたうえで、この勉強会にのぞんでもらいたい。そうすれば、修復腎移植を前向きに検討しようというわれわれの方向が正しいことをしっかりと理解できるはずですよ」

杉田がこのように会の性格と方向を明示し、勉強会がはじまった。

最初に、分刻みのスケジュールを割いて初参加の議員もいたので、光田医師が移植医四人を代表し、修復腎移植の病理学的な原理を縷々説明し、そのつど議員の質問に応えた。つぎに腎移植の歴史を紹介し、いわゆる健康な腎移植よりも修復腎の移植のほうがずっと歴史は古く、日本でもこれまで親族間の生体腎移植で九十例の修復腎移植がおこなわれていたことを明らかにした。つまり病腎移植は決して新しい発明でも実験的な医療でも保険医療担当規則が禁じる「特殊な療法」でもなく、これまでの医療技術と薬剤をくみあわせた医療上の一工夫にすぎないことを光田医師は強調した。

このあと四人の医師は交互に、議員の質問に答えるかたちで、「がんの臓器移植は禁忌中の禁忌」、あるいは「移植できるほどの腎臓なら患者にもどすのが当然」、そして「径四センチ以下の腎がんは部分切除か自家移植が常識」という移植学会幹部の批判が、移植医療の臨床の現場や最新の知見にもとづかない、批判のための批判であることを具体的な事例にもとづき証言した。たとえば病腎をとりだしてがんのある部位を切除し、ふたたび患者にもどす自家移植がどれくらいおこなわれているか全国的な調査をおこなったところ、自家腎移植をしたケースほとんどなく、臨床の現場では廃棄することのほうが常識であった。

医師たちの証言がすむと、患者を代表して向井原と森、それに水野が自らの移植体験を語り、修復腎移植の有効性を訴えた。漁師、弁護士、新聞記者としてそれぞれ健常者とまったくかわらない生活をしている三人の訴えは迫力と説得力があり、議員たちは何度もうなずき、厚労省の役人をにらみつけていた。

最後に勉強会の山場でもある、処分の妥当性について、患者席から元移植コーディネーターの原が立ち上がり、厚労省へ質問をぶつけた。

「保険医取り消しの処分根拠は、診療報酬の不正請求ということですが、一連のいわゆる病腎移植はすべて医科点数表が定める「移植術」として審査機関が受理し、適正に処理されております。光田先生の場合を申しますと、病腎移植のレセプト処理をした際、移植した腎臓はどこからでてきたものか、という問い合わせが審査機関からあり、そのつど光田先生は病気でとりだされた腎臓を移植に用いたことを自らレセプトに書き加えており、その書類は現存しておりますので、いつでも証拠として示すことができます。厚労省はこのことを承知していますか」

局長が課長へ応えるようにながした。

「診療報酬については所管ではございません」

と課長は素っ気なくいった。患者から逃げるな、担当を呼べ、と声をとんだ。

「病腎は集計上、生体腎移植としてあつかう、という取り決めまで審査機関との間でできていましたが、ご存知ですか」

「いえ、承知しておりません」

「それでは私のことで申し上げます。丸山先生が修復腎移植をされていたとき、コーディネーターの私は、病気で摘出した腎臓を、移植を待つ患者に医師の判断で独自に移植することは、幹旋業を禁止している臓器移植法の法規に違反することにならないか、厚労省の臓器移植室へ問い合わせたことがあります。回答は違反ではない、ということでした。もう十数年前のことではありますが、いま同じことを問い合わせれば、厚労省はどのようにお答えですか。教えて下さい」と原は重ねて質問した。課長がたちあがり、

「その点につきましても、担当部署ではありませんので、お答えできません」といった。

原はなお食い下がった。

「私ははつきり記憶しております。病腎移植の場合、生体腎の加算も死体腎の加算もせず、もちろんドナーにかかる療養費も請求しておりませんので、このことは同種腎移植、すなわち人の腎臓を人の腎臓に植えるという移植手術として、病腎移植を審査機関が公然とみとめ、支払いに応じていました。したがって、社会保険事務局が処分の根拠としている病腎移植手術の不正請求自体がなかったのです。このことは認めますか」

課長はすぐに立ち上がり、担当部署ではないので答えられない、と念仏のようにいった。

すると、両者の応答を聞いていた議員のひとりがたまりかねたようにいった。「局長、丸山医師のやったことが悪いというなら、告発すればよい。厚労省にはその気があるのかないのか、答えろ」

他の議員も、そうだ、そうだ、はつきりしろ、と声をあげた。

局長は周囲をみまわし、

「告発はしません」

と応じた。そこで杉田は声を強め、たしかめた。

「告発しないということならば、ふたつの病院と丸山医師への行政処分はない、と考えてよろしいか」

「行政処分というのは、いかなることでしょうか」

「保険診療資格の取り消しですよ」

「そのことでしたら、担当部署ではありませんので、答えられません」と局長は細い声でいった。

勉強会の終了後、記者会見に応じた杉田は、超党派の議員連盟を結成し、修復腎移植をみとめ保険適用を可能にするために、喫緊にも関連法規の改正をめざすことになる、と断言した。

二〇〇八年になった。

年明け早々の一月十一日、全国紙はいっせいに厚労省が年度内にも二つの病院と丸山医師を処分する方針である、と社会面で報じた。地元の愛媛新報は当然一面で大きなあつかいである。水野は情報源をたしかめるため、出社すると役員室へ電話をいれた。秘書が津和田は欠勤だということで、社会部へ電話をまわしてもらった。

「いよいよですね」

と開口一番、対応にでた村木が処分のことをいった。

村木は昨年三月、アメリカへ派遣された女性デスクである。そのおり、全国移植学会の中田理事長の英文書簡を全米移植外科学会のメイタス会長から入手し、丸山医師のアメリカでの発表中止をいち早くスクープしている。ふりかえると特集記事はそのころ大いに熱がこもっていたが、厚労省が病腎移植原則禁止の通達をだすと、とたんにしりすぼみになっている。特命チームも解散していた。メディアの側からいえば、病腎問題の賞味期限はとっくに切れていた。それで水野にしてみれば、ひさしぶりに病腎問題がちゃんとした記事になった感があつた。処分はもちろん大きな社会問題でもある。

「村木くん、これ、厚労省だね？」

水野は情報源をたしかめた。

各紙が横一線で同じ内容の記事を書いていた。記者が独自の取材をせず、記者クラブに流された情報をそのまま記事にするとこのようになる。

「いえ、社保局です」

村木は愛媛社会保険事務局であることを明かした。

「そうか、出先はそうかもしれんが、まちがいなく厚労省の指示だな」

「はい、そうだと思います」

「村木くん、これは世論操作だよ」

と水野は声を強めた。

「そうでしょうか」

と水野の考えをやわらかく否定し、自分の意見をいった。

「立場によって受けとめかたは異なると思っています」

送話口へむかって水野は一気に話した。

「きみ、そんなのんきなこといつちやダメだよ。うちだけじゃなく、どこの記者もまるで子どもの使いみたいに、処分が年度内にあると報じている。お上もお上だが、そのまま受け売りしている記者も記者だ。けしからん」

どの新聞も記者クラブでくばられた社保局からのペーパーを、そのまま活字にしているだけのような記事である。

すぐ村木が反論した。

「でも水野さん、市立病院は処分のうけいれを表明しているじゃありませんか。宇和島市は予想される返還金一億円を来年度予算にくみいれています。処分はすでに決まったも同然じゃありませんか」

「それはな、市立には市立の事情がある。実益を優先……」

思わず市立病院全面改築工事からみ、ひそかながされている取引の噂を水野は口にしようとして、自制した。

「実益？　なんですか、それ」

「いや、まあ市立のことはともかく……」

水野は口ごもり、恵州会のことをいった。

「いいかな、恵州会は聴聞を要求している。各紙がこのように報じると、もう処分は決まったみたいじゃないか」

「お言葉ですが水野さん、聴聞はたんなる形式ですよ。これまで聴聞で処分が取り消されたなんてことは一度だってありません！」

「怖いことをいうな。きみ、まさか国がやることはなんでも正義だ、なんて考えてはいないだろうな。記者クラブにながされたものをそのまま記事にするなら、ジャーナリズムとはいえん。権力の片棒をかついでいると批判されてもしいたないぞ」

と水野がなげいてみせると、村木はヒステリックな声でいった。

「大変申し上げにくいのですが、水野さんのおっしゃることこそ、すこし恵州会によりすぎる発言だと思えます」

「それはちがう」

「いえ、お立場はよく承知しております」

「立場？　なんのことだ」

「私からは申しあげられません」

「津和田専務がなにかいつていたのか」

「いえ、存じていません」

と村木はきっぱり否定した。

藪蛇になりそうである。問いただすことをやめ、水野は不快な気持ちをおしこむように受話器をおいた。臓器売買事件直後に部長職をとかれ、編集委員という閑職へまつりあげられたときのことが頭をよぎった。そのときから移植医療の紙面はひと世代も若い記者たちによってつくられ、水野はうとましい存在になつていたのである。しばらく窓の外をながめて気持ちを静めると、水野は社保局への対応をあれこれと考えた。求める会としても、このまま黙って処分をうけられることはできない相談だった。なんとしても丸山医師を守らなければならぬいし、修復腎移植への道を閉ざすことはできない。

日曜日の午後、一週間後にせまった東京での国際腎シンポジウムの中で水野は役員会をひらき、惠州会本部から届いている進行台本をもとに打ち合わせをした。テーマは「日本とオーストラリアの修復腎移植」である。

シンポに参加する会員たちは、役割分担を確認しあつた。そして待ちかねていたかのように、みんなの関心と話は聴聞と処分のことに集中した。

どちらもさけられそうにない状況だった。聴聞で惠州会も丸山医師も素直に非を認めて謝罪し、改善策を早急にとりまとめて上申すれば、これまでの事例からして処分期間は大幅に短縮されて一週間前後になり、地域医療の大混乱はさけることができる。処分をうけられる市立はすでにその方向へ舵を切っている。惠州会も市立にならつたほうが得策だという意見が地元の宇和島市と周辺住民からあがつていた。しかし求める会には、妥協をしようという声はなかつた。役員たちの気持ちを代弁し、

「厚労省と闘うのは、惠州会だけでええ。市立もまきこんだら南予の医療は大変なことになるけん。もちろんわしらも闘う。すいませんと謝つたら、修復腎を否定することになるけん。処分するといふなら、厚労省相手に行政訴訟をおこす。求める会は丸山先生と病腎移植のためにとことん闘う」

と向井原が決意を表明すると、拍手がいつせいにわきあがつた。

この夜、水野の携帯に野添事務総長から電話があつた。

野添は惠州会のうごきをつぎのように水野へ伝えた。

聴聞にそなえて、惠州会本部は行政手続法を専門としている弁護士をふくめ九人の弁護士団を結成した。徳川理事長は療養先に弁護士団をまねいて決意をのべた。

「タトエ惠州会ガツブレ、自分ヒトリニナルコトガアツテモ、丸山医師ヲマモリ、修復腎移植ヲ推進シテククタメニ闘ウ」。

翌週の第三水曜日、定期検診がすむと、水野は丸山医師と話をかわした。

聴聞は恵州会病院が先で、それから丸山医師本人の順である。会場は松山市の繁華街の近くにある愛媛社会保険事務局なのだが、日時がいつになるのか、まだ通知は丸山医師のもとへ届いてはなかった。

水野は心配していたが、丸山に深刻な様子はみられなかった。かれはいわば在野の職人である。経営や行政といったことならとおよそ無縁な医師である。自分の身に迫っている行政権力についても、まだどこかよそ事のようなところがあった。

水野は聴聞や処分についてはふれず、まぢかになつた全米移植学会での研究発表のことを話題にした。いやがらせが入り、発表しそこねた論文である。自分もふだんネクタイをしないので、結び方をわすれてしまい、院長の住田から先日教わつた。学会発表の日はサンダルを革靴にはきかえ、着慣れないスーツで登壇し、英語でスピーチをすることになる。なれない食事のこともあるし、いろいろ思い浮かべると、面倒くさい、と丸山はアメリカへゆくこと自体に困惑していたが、いうこととはうらはらに、瞳はいつになく輝いていた。

気分がほぐれ、水野は年初からの懸案だった頼み事をした。

宇多津町の腎クリニックに通っている亀岡ことである。

正月早々に、水野は電話で亀岡から気の重い相談をうけていた。

かれは年始のあいさつもそこそこに、

「あなた、本当に裁判をする気はあるのか」

と水野をなじつた。

提訴にそなえて宇多津の亀岡のほか、岐阜、岡山、呉の会員の中から一人、それに松山の水野をくわえて、すでに五人の原告団が結成されていた。訴訟準備書面も岡山の森弁護士が中心になって作成している。いつでも裁判をおこせる態勢はできていたが、処分が決まり次第、その内容をふまえ、提訴のときを判断することになっていた。

なぜそんなに急ごうとするのか、水野がただすと、

「宇和島の恵州会へ転院したい」

と亀岡はいつた。

理由は、透析と濾過を同時におこなうオフラインHDF（血液透析濾過法）をはやくから導入している恵州会で治療をうけたいというのだが、それはあくまで表向きの話である。

「宇多津にもオフラインのある病院があるはずだが」

と水野が近くの病院をすすめると、

「病腎でもええ、丸山先生から移植をうけ、社会復帰したいんや」

と亀岡はあえぐようにいつた。学会幹部を訴えれば、名誉と体裁を重んじるかれらは和解に応じ、病腎をみとめることになるにちがいない。すると厚労省も病

腎禁止の通達を撤回するだろうから修復腎移植は再開されることになる。だから早く裁判をおこせ。このままだと裁判になる前に、自分は死ぬかもしれない。裁判を急いでくれ、と水野をせかすのである。

透析困難症である亀岡の苦しい病態がわかるだけに、水野は亀岡のために動いた。亀岡が転居するアパートは宇和島の求める会の会員に確保してもらった。それに家庭教師先も数件みついていた。生活上のこまかなことは支援者がやってくれる。

「先生にぜひ診てもらいたい患者がいます」

と水野はきりだし、亀岡の病歴を説明したが、病腎の移植を切望していることは隠した。宇和島恵州会病院でも廃棄している病腎はたくさんあるのだが、まだ移植にはつかえない。

「そりゃ深刻やなあ」

と丸山は眉宇をせばめた。

もとより医師は患者をこぼめない。転院してきたら本人をしつかり診て、どのような治療が最適か考える、と丸山は応えた。

水野はいつもどおり昼食を港の食堂ですまし、棧橋の近くの空き地に車をとめてぼんやりとしたあと、診療所へ車をはしらせた。

「奥さんはどうしていますか」

水野の顔をみるなり、内藤が心配した。

「いま、パッチワークにこつています」

と水野は微笑をうかべた。

久美子は発病したころの徘徊や衝動的な行動はなくなっていた。いまは話しかけても反応は鈍く、おとなしい。グループホームではじめたパッチワークにこりはじめ、休日に自宅ですごすときも、居間でぼそぼそとぬいものばかりしていた。落ち着いてきたのは、治療の成果というよりも、数年後には訪れる衰弱死にむかって、症状が一步も二歩も進んでいる証拠であった。所作がひどく緩慢で、問いかけてもほとんど返事をしなくなった久美子をみながら、一緒におれるのはあと何年だろうか、と水野は想うときが多くなっている。そして、もくもくと縫い針をうごかす久美子をみつめていると、子どもを授かり、ベビー用の衣類をつくらっていたころの妻のすがたとかさなり、水野のなかにしみじみとした想いがこみあげてくるのだった。

内藤に妻のことを訊かれ、自然にパッチワークという言葉が水野のくちをついた。内藤は水野の心境がよくわかるらしく、目を細めうなずいていた。

「改装工事は順調ですね」

と、水野は通りがかりに目にした市立病院のことに話題をうつした。改装とい

つても病院内の敷地に全面的な建て替えをしている。最上階までくみあがった鉄骨が冬の空にそびえ建っていた。竣工は来年の秋である。

「市としては大きな仕事だからねえ」

おだやかだった内藤の視線がきびしくなった。

「四国西南地域の拠点病院にふさわしい建物になりそうですね」

「そりゃ、みんな楽しみにしているよ」

「二百億円ですか」

と水野がむしかえずと、

「返還金の二億円は、安いものだね。ぼくは最終的には市の判断を支持している。個人的なことをいうつもりはない。病腎のことは水野さん、あなたが組織している求める会と惠州会のがんばりに期待している。すこし時間がかかるだろうが、修復腎が腎移植の主流になる時代がかならず来る。ぼくは信じていますよ」

「しかし市立の処分、やはり心配です」

と水野が案じると、内藤はふつと息を吐き、いった。

「心配におよびません。落としどころは決まったそうです」

「落としどころ？」

「政治決着ですよ」

「やはり政治ですか」

水野はさもありません、という思いがした。

「五月の四連休に入る直前に保険医療機関の取消を行い、連休が明ける日の早朝、取消を解除する。多分、そのようになる」

「なるほど、それだと患者も病院も困らないし、厚労省もメンツは立つ」

「あと、厚労省にとってやっかいなのは惠州会です」

「聴聞、どうなりますか」

「民と官のガチンコ勝負になれば、けが人がでるでしょう」

内藤は表情をひきしめた。